

ゆめじゆうや 夢十夜

なつめ そうせき
夏目漱石
なつめ そうせき

こんな夢を見た。

腕組をして枕元に^{すわ}坐っていると、^{あおもむき}仰向に寝た女が、静かな声でもう死にますと云う。女は長い髪を枕に敷いて、輪郭の^{りんかく}柔らかな^{やわ}瓜実顔をその中に横たえている。真白な頬の底に温かい血の色がほどよく差して、唇の^{くちびる}色は無論赤い。とうてい死にそうには見えない。しかし女は静かな声で、もう死にますと判然^{はつきり}云った。自分も確^{たしか}にこれは死ぬなと思った。そこで、そうかね、もう死ぬのかね、と上から覗き込むようにして聞いて見た。死にますとも、と云いながら、女はぱっちり^あと眼を開けた。大きな潤のある^{うるおい}眼で、長い睫に包まれた中は、ただ一面に真黒であった。その真黒な眸の奥に、自分の姿が鮮^{あざやか}に浮かんでいる。

自分は透き徹^{すとお}るほど深く見えるこの黒眼の色沢を眺めて、これでも死ぬのかと思った。それで、ねんごろに枕の傍^{そば}へ口を付けて、死ぬんじゃないだろうね、大丈夫だろうね、とまた聞き返した。すると女は黒い眼を眠^{みはつ}そうに睜^{みはつ}たまま、やっぱり静かな声で、でも、死ぬんですもの、仕方がないわと云った。

ゆめじゆうや
夢十夜

なつめ そうせき
夏目漱石
なつめ そうせき

こんな夢を見た。

腕組をして枕元に^{すわ}坐っていると、^{あおもむき}仰向に寝た女が、静かな声でもう死にますと云う。女は長い髪を枕に敷いて、輪郭の^{りんかく}柔らかな^{やわ}瓜実顔をその中に横たえている。真白な頬の底に温かい血の色がほどよく差して、唇の^{くちびる}色は無論赤い。とうてい死にそうには見えない。しかし女は静かな声で、もう死にますと判然^{はつきり}云った。自分も確^{たしか}にこれは死ぬなと思った。そこで、そうかね、もう死ぬのかね、と上から覗き込む^{のぞ}ようにして聞いて見た。死にますとも、と云いながら、女はぱっちり^あと眼を開けた。大きな潤のある眼で、長い睫に包まれた中は、ただ一面に真黒であった。その真黒な眸の奥に、自分の姿が鮮^{あざやか}に浮かんでいる。自分は透き徹^{すとお}るほど深く見えるこの黒眼の色沢を眺めて、これでも死ぬのかと思った。それで、ねんごろに枕の傍^{そば}へ口を付けて、死ぬんじゃないだろうね、大丈夫だろうね、とまた聞き返した。すると女は黒い眼を眠^{みはつ}そうに睜^{みはつ}たまま、やっぱり静かな声で、でも、死ぬんですもの、仕方がないわと云った。